

『地球／惑星文学としての物語の可能性と行方』

岡田 リチャード 英樹

今回はお招きいただきまして光栄です。井伊先生、陳先生を初め、国文学研究資料館の皆様にご心から厚く御礼申し上げます。

今地球が直面している、一番大きな問題は環境問題だと答える人は多いと思います。人類の化石燃料への過度の依存のため温暖化が急激に進行し、生態の著しい破壊が看過できない現象となっていることを考えれば、私も同感せざるをえません。そこで、なにか私なりにやらなければならないと痛感しまして、環境問題と文化／日本文学の連結の可能性について考え始めました。

考え始めたのは何年か前のことですが、その当時と違って、最近では「エコ何々」、あるいは「グリーン何々」という言葉をあちこちで見かけます。日本では、例えば、エコライフ、エコクッキング、エコクリーニング、エコビジネス、エコツーリズム、エコブログ、エコプロダクツ、エコファミリー、エコウォーク、エココミュニケーション；英語では、eco-system、eco-feminism、eco-criticism、eco-tourism、eco-mentality、eco-portal、eco-bags、eco-cycle、eco-cell、eco-challenge、eco-mail、等々。こうした例は、資本主義社会での商品化の過程も物語っていますが、にも関わらず、「エコ」の必然性の意識が広く行き渡っている証拠でもあります。しかし、環境問題への関心が大分高まってきているとはいえ、学問、とりわけ人文学の分野全体にはまだまだ入っていないようです。その事情を変えなければならないと思い、今回のような話が生まれたわけです。つまり、たとえば、科学と人文学というような分野と分野の境界線をなるべく問題化しなければならないということですね。

自分の経歴

そこで、まず初めに、これまでの私の経歴を簡単に述べさせていただきたいと思います。

私はもともと物語文学を勉強していきまして、特に『竹取』『伊勢』『源氏』や後期の『狭衣物語』をやってきました。ところが、ある日、私の先生（古い言葉で言うと私の恩師）が、「もうそろそろ源氏学なんかを卒業して、近・現代のものに変えなさい」と言って、「古い時代に関する本を全部燃やしてしまいなさい」と言われたのです。そうは言われても、私は長い間平安時代のものをやっていたので、そう簡単には止められなかったし、止めたくもありませんでしたけれども、近現代のものには以前から興味がありましたので、以来そちらの方にも力を入れ始めました。それともう一つ申し上げておきたいのは、文学作品を読むと同時に理論にも興味があるということです。大学院時代、ジャック・デリダやミシェル・フーコーやポール・ド・マン等が周りの友人に読まれていまして、私も感動しながら読み始めました。まだまだ一般には理論は読みの外部のものだと思われるようですが、実は理論は外部にはあらず、内部にもあらず、どの読みも可能にする、或いは不可能にする装置のようなものだと思うようになりました。

私が理論に関心を持ったのは、アメリカでの日本学（ジャパノロジー）に対して不満を感じていたからです。私はUCバークレーにいましたが、その先生のやり方に特に不満でしたし、もっと率直に言いますと、アメリカ全体のジャパノロジーの研究者のやり方にもほとんど賛成できませんでした。その頃のやり方と言うのは文法の解説とテキストの翻訳、そして歴史的背景をある程度しらべることで、まあ、よくある実証主義的なアプローチでした。

そこで、私はナラトロジーやポール・ド・マン流のレトリックの脱構築が平

安時代のテキストを読むには相応しいのではないかと思って、私なりにやり始めました。とにかく、実証主義が根本になっていたジャパノロジーを脱構築できる立場に自分を位置づけたかったのです。

その当時から私は、学問のレベルでの連結性、とでもいうことを重視していました。例えば、フェミニズムを扱う時、ジェンダーだけではなく、エスニック・スタディーズやポストコロニアル批評との関連性を認めていました。今はこういう関連付けは常識になっていますが、少し前まではそうではなかったです。

エコロジーが提供してくれる問題意識

最近、そういう連結性を考える延長線上で、エコロジーや環境問題に興味を持つようになりました。エコ研究の開拓者の一人バリー・コマナー（Barry Commoner）はこう言っています：「相互連結性はエコロジーの第一法則です（The first law of ecology is that everything is related to everything else）」。その例として、まず、ピーター・シンガーと言う人が、「9/11の同時多発テロ事件と先進国に住んでいる人々がSUVに乗ることの違い」ということを取り上げています。この後者の例は、環境にダメージを与えているにもかかわらず、はっきり見えないところにその現象が起こっています。その見えないものをビジブルに、つまり可視化することはエコ研究の神髄の一つです。

私がエコロジーの問題に取り組む一つのきっかけとなったのは、プリンストン大学にある「プリンストン大学の環境学センター」からの知らせでした。それは、エコロジーと人文学（ヒュマニティーズ）を関連付けた授業を始めたい人には奨励金を出すからコースについてのプロポーザルを送るように、というものでした。それに応募して採択されて以来、二年に一度くらい日本文化と環境問題の授業をやっています。

今日の話はそういうきっかけから始まったわけですが、今ではその必要性に確信を持っています。今の私の姿勢からすると、極端に聞こえるかも知れませんが、文学／物語を論じるに際して、どのように環境問題を同時に考えられるかが肝心です。化石燃料や温暖化が問題になっている以上、我々教育者・研究者は、どの分野に属していても、どんな授業を教えていても、どんなテーマを扱おうとしても、環境問題やエコロジーの要素をなにかの形で授業に取り入れたり、学生や同僚に考えさせたりする義務があると思っています。つまり、環境やエコロジー研究が提供してくれているタームや概念や問題意識を通して文学、特に物語、特に『源氏物語』を考えてみたいと思っているのです。従って、今日は、「エコ・源氏」とでもいうようなものを成り立たせたいとの希望のもとに実験的に話を進めていくことにします。

地球／惑星のあらゆるものの連結性 (Interconnections)

あらかじめお断りしておきたいのは、ここでいう『エコ・源氏』とは、『源氏物語』の中に自然はどう描かれているかとか、紫式部の自然観はどうであったかとか、日本人の自然観はやはり素晴らしい物だとか、そういうたぐいのことを論ずるつもりでは全くないということです。かと言って、狭い科学的な観点からの話をするつもりもありません。むしろここで問題としたいのは、エコロジー研究に因んで、地球／惑星にあるすべてのものの相互連結性とでもいうことを心得た時、物語に対してなにが言えるか、と言うことです。

文学とエコロジーの繋がりを考える時、私が使いたいのは、最近一部の人々が「メンタル・エコロジー」と呼んでいる概念です。「メンタル・エコロジー」においては、地球のあらゆるものに対してどんな態度をとるべきか、どんな風に考えるべきか、が問題となります。その際、今申しました相互連結性が重要だというわけです。これは当たり前のように思われるかもしれませんが、

レベルとレベルの違いを考える時も果たしてそれは当たり前でしょうか。例えば、『源氏物語』を扱う際の姿勢は、地球の資源や生き物に対する姿勢と決して異質のものではありません。従って、私達が文学作品を分析する時に前提としている思想やイデオロギーや方法は、地球上の万物に対してのそれと同じで、両者を切り離すべきではないのです。

グローバルより地球／惑星を重んじる

世界規模の現象を言い表す言葉はすでにいくつかあります。例えば、よく使われる「グローバリゼーション」ですね。その他にも「ボーダレス・ワールド」とか、ちょっと違いますが、「サイバー・スペース」のような言い回しもあります。しかし、「グローバリゼーション」のようなタームは、これからお話しします相互連結性を表すようには使われていないと思います。確かに我々は、そうしたタームを、ある一つのレベル、例えば経済のレベル、で世の中に起きている現象が繋がっている、という意味で使っていますが、レベルとレベル、或いは分野と分野、との関係にまで視野を広げてみることは非常に少ないと思います。そういうタームに抵抗を感じて、ある人々は最近「プラネット」又は「プラネテラティー」と言うタームを使った方がいいと主張し始めました。「グローバリゼーション」はもともと人間中心に作られた言葉ですが、「プラネット」を使うと、人間の主体性が常に中心から外れます。問題は人間中心になると二項対立的な状態がどうしても発生します。戦争がその著しい例です。しかし、プラネットのレベルになると、人間から遠いところで法則が働いているわけですから、人間は常に多くの中の一つの生き物にしかならないわけです。

ここで、「メンタル・エコロジー」というタームの成り立ちを見てみましょう。

三つの引用 (Three Citations)

次の三つの引用から話を進めて行きたいと思います。

1. 「雑草のエコロジーがあるように、悪影響を与えるアイデアのエコロジーがあります」(Gregory Bateson, Steps to an Ecology of Mind)
2. 「横断的 (transversally) に考えなければなりません」(Félix Guattari, The Three Ecologies)
3. 「文化は常に同時に宣戦布告なり」(Werner Hamacher, “One 2 Many Multiculturalisms”)

グレゴリー・ベイトソン (Gregory Bateson) は「エコ・メンタル・システム (eco-mental system)」という言葉を使っています。残存状況 (サバイバル) のことを考える時、ダーウィン以来の従来の自然科学では、一人の人間、或いはその家族や家系、動植物の種や亜種が進化の単位とみなされてきましたが、ベイトソンは、実はそうではなくて、進化的サバイバルの単位は「生物プラス環境 (organism plus environment)」とすべきだと、ダーウィンの説を訂正しているのです。例えば、琵琶湖というエコ・メンタルシステムがあつて、これは人間の広い意味でのエコ・メンタルシステムと重なる訳です。琵琶湖が汚染されると、人間の精神も汚染されます。一人の人間を進化の単位にすえて、その単位の利益だけを視野に入れて、廃棄物を簡単に捨ててしまうと、そのおかげで琵琶湖が汚染されるということになってしまいますし、ひいては、ベイトソンの言うところの「もっとデッカイ爆弾をこしらえて隣のやつをやっつけてしまおう」という態度にまでつながりかねないのです。まあ、これは、アメリカのブッシュ政権のやり方そのものでしたね。

そこで、フィリックス・ガタリ (Félix Guattari) ——有名なドゥルーズ&ガタリのガタリですが——はベイトソンの考えを広げて、三つのエコロジーを挙げています。

1. 自然環境のエコロジー（普通の意味）
2. ソーシャル・エコロジー（社会的なレベル）
3. メンタル・エコロジー（個人的なレベル）

その三つに加えて、もう一つ重要な点は、ガタリがThe Three Ecologiesと言う本の中で言う横断的（transversal）な考えかたです。横断的思考（Transversal thinking）と言ったり、または、エコソフィー（ecosophy）とも名づけてあります。これは、四六時中、相互連結や関連問題を考えて行かなければならないと言う姿勢です。環境を変えるには、そして惑星^{プラネット}を救うには、最終的には人間が考え方を根本的に変えなければならないと言うことですね。つまり、メンタル・エコロジーとは、例えば、地球温暖化の問題の解決策を国々の政策に任せるのではなく、むしろ、近代国家が生み出した自我（self）と他者（other）に関する態度や考え方そのものから変えていかなければならないということです。

地球／惑星の状況、脳の状況（State of Planet, State of Mind）

従って、我々の普段の考え方を徹底的に変えなければならないと言う主張が今日の話の根本的な意味です。ガタリに言わせると、環境問題を解決するにはメンタル革命が必要になるのです。

そこで、ワーナー・ハーマカーからの引用を私なりに簡単に説明させていただきます。ハーマカーの論文は、マルチカルチャー主義を問題にしています。エコロジーには直接触れていませんが、ベイトソンやガタリの考えによく似ているところが沢山あります。

ハーマカーに言わせれば、文化を論じるのは実にややこしい作業です。近代国家は文化を通して、その権力を維持していき、国民を服従させ、支配します。しかも、ルイ・アルチュセール（Louis Althusser）が言うように国民は常に「呼びかけ（interpellation）」のお陰で、その権力の働きの実情が感知されない

ように来ています。ハーマカーは、それと同時に、文化というものは他者を常に排除する働きも持っていると主張します。他者を排除しながら、資本主義との絡み合いで、人間、動物、植物等を商品化して行きます。もともと可能であった多元性、多様性（diversity）が消えてしまって、一元性、統一性、所謂モノカルチャーの概念が優先して、支配的になる訳です。

生物学の例をあげましょう。環境学の知り合いによると、自然はほっておくと多種多様な状態になるらしい。そして、虫も動物も多種的に生息するのです。ところが、色々な植物が生えていた所に人間が単一栽培をするようになると、モノカルチャーの状態ができて、自然の多種多様性が破壊されてしまいます。モノカルチャーと資本主義の商品化との絡み合いがもたらす環境に対する被害については、色々な人が論じています。開発と利益のために単一栽培が主流を占めるようになって、エコ・システムが破壊されて行きます。そうすると、不必要なもの（つまり資本主義のもとで利益にならないもの）は全部排除されてしまうのです。昔は単一栽培や連作ではなく、輪作が普通でしたが、今はそうではないらしい。

さて、もう一度、ハーマカーのいう文化のレベルに戻りましょう。モノカルチャー優先に関してさらに問題なのは、そのモノカルチャーが今度はマルチカルチャー主義を主張する場合があるということです。つまり、他者を排除したモノカルチャーがマルチカルチャーの神話のもとで存在するようになるのです。しかし、そのマルチカルチャーは、実は常にモノカルチャーであって、逆にモノカルチャーは常にマルチカルチャーであります。ハーマカーが言うにはカルチャーそのものはもともと不可能でありながら、なくてはならない現象です。人々は理想的なカルチャー概念に向かおうとしながら、その理想には永久に達することが出来ない状態がカルチャーで、その不可能なカルチャーに気づかず陥っているわけです。にもかかわらず、国民は強引に、そのアポリアを考えな

いで、カルチャーを成り立たせます。

一般的に言うと、ある国民は自分の持っているカルチャーを（カルチャーは本来所有できるものではないのに）定義しようとします。そして、定義するためには自分のカルチャーを他のカルチャーと比較しなければなりません。ほかのカルチャーと比較すること自体は、自分のカルチャーは単一的ではないという証拠になるはずですが、普通はそう言うことを忘却し、逆に自分のカルチャーにははっきりとした境界（ボーダ）線（一）が描けると思って、単一性という神話に支配されてしまいます。ボーダーを強引に描いて、自己同一性の神話を、つまりアイデンティティー、を獲得します。しかし、そうである限り、そこから一步進むと、ハーマカーが言うようにカルチャーは常に、同時に、宣戦布告だということになります。

横断的に考えて、これを学問的なレベルに言い換えれば、我々は普段一つのテーマを取り上げる時、比較的狭い範囲の連結性を考えますね。文学作品を読んでいると歴史や社会や経済や宗教問題等を視野に入れて研究を進めます。その総合的なやり方の必要性をおそらくはっきりさせたのが所謂カルチャー・スタディーズです。つまり、通常の学問的なやり方としては、一つの分野がベースになって（例えば文学がそうであるとして）他の分野のやり方とか情報があくまで背景的な、補助的な、役割を果たすことになってしまいます。我々は自分が属している分野を自分の特別な領域だと思って、その領土の境界線を守らなければならないと思うようになってきているのですね。我々は学問制度そのものによってそう訓練されていますから。このように分野と分野の境界線を大切に保てるのは、分野ごとの規則とか決まり、方法（methodology）があるからです。それに従わないと出世できないようになっています。マルチディシプリンとかインターディシプリンとかよくいいますが、そもそもそれはマルチカルチャーと同じで「マルチ」とか「インター」ではないと思います。

つまり、今まで分野別とか領域的に考えて来たもの、例えば、大学での分野（ディシプリン）別の学科、理論の範疇に入る作業（例えば、文学批評、フェミニズム、マルクシズム、ポストコロニアリティー等）、環境問題、近代国民国家の発展過程、資本主義の普及及び商品化等、これらをなるべく相互的に捉えなければならなくなっていると思います。いや、相互的に捉える義務が我々にはあると思えてなりません。

ここまで論じてきたことを念頭において、最後に、物語文学、特に『源氏物語』に簡単に触れたいと思います。

源氏物語とモノカルチャー（*The Tale of Genji and Monoculture*）

単一栽培は、単一文化とか単一民族と言う概念と密接に関係していると思います。ここで横断的に考えれば、単一栽培と文学批評も同様に関係しているはずです。

メンタル・エコロジーの立場からいうと、近代国民国家の単一性神話は文学的モノカルチャーを生み出します。『源氏物語』の場合、一方において、その近代的読みはしばしば国民国家のモノカルチャーと共謀しています。例えば、源氏と紫の上を理想のカップルとして読むこと、光源氏を物語のヒーローにすること、物語の54帖を本編と続編とに分けること、語りの流れを歌と散文とに分けること、登場人物の心中思惟を厳密に定義しようとする事、近代活字印刷のため仮名や漢字の物質性が抹殺されること等々。他方において、多くの源氏研究者が指摘してきたように、『源氏物語』は絶対モノカルチャーの産物ではなくて、非常に多様なテキストです。（最近話題になっている大沢本の大切さも視野に入れて）今日私が問題にしたいのは、その研究成果をメンタル・エコロジーの問題に結びつけることです。それを『源氏』批評に於いて不可欠な

部分にしなければならないと思います。『源氏』批評がどこまでモノカルチャーの先入観に囚われているかを分析することは「エコ源氏」を作り出す作業の一つだと思いますし、言ってみれば、『源氏物語』のエコ・メンタル・スペースを切り拓いていくことでもあります。

『源氏物語』とディスプレースメント (*The Tale of Genji and Displacement*)

言い替えると、『源氏物語』はモノカルチャーとは常に違う次元に動いていると思います。様々な要素が多能的に織り込まれていて、モノカルチャーの一つのディシプリン (例えば「文学作品」) として扱おうと排除されてしまうものが多くなって、テクスチュアル・ヴァオレンス (textual violence) とでもいう現象が起こります。これは環境に対するヴィオレンスに似ています。『源氏物語』のどの部分を見ても、ディスプレースメントの装置が働き、語りの姿勢は常に単一的な、総体的に支配出来る読みを拒もうとしています。『源氏物語』からいくつかの例を簡単に上げてみましょう。

1. 時間のdisplacement: 始まりと終わりが無い。物語がいつ始まって、いつ終わるかがはっきりしていません。「きりつぼ」の巻の冒頭の「いづれの御時にか」で物語は一旦始まりますが、それははっきりとした時間的な始まりではありません。むしろ、それは語りの始まりにすぎないです。さらに、次の「ははきぎ」の巻に来ると、「雨夜の品定め」の場面の三人の登場人物による「語り」が繰り広げられます。その語りの中の語りには後に出てくる人物が示唆的に登場します。物語が常に「ははきぎ」の始まりを振り返りながら進んでいきます。「きりつぼ」の光源氏の血縁的な生い立ちが「ははきぎ」の複数の語りにディスプレースdisplaceされてしまうと言えないでしょうか。それと同じように、『源氏物語』のテキスト全体はモノカルチャー的な読みをディスプレースして行くはずで

2. 系統のdisplacement：光源氏のライン（家系）は一応政治的には成功すると言えるかもしれませんが、物語はその主流が作り出す非主流派のほうに焦点を絞って行きます。光源氏自身もそうだったし、頭の中將のラインも、八の宮のラインも特にそうですし、常陸の宮もそうです。「竹川」の巻きはそのことで有名です。

3. 「ゆかり」と言う言葉：「ゆかり」もディスプレイメントの働きを表しています。英語ではsubstitutionという風に訳することもあります。substitutionの場合は誰の立場から入れ替えが行われていることが大事になります。一方、「ゆかり」の場合は必ずしもそうではなくて、見ている立場が安定していない場合もありますし、入れ替えと言うより重なるということのほうが多いような場合もあります。それは、例えば、紫の上と藤壺や一ノ宮と二の宮を見れば分かると思います。

4. 語ることと書くこと：最後に、『源氏物語』の中には書く行為、あるいは、描く行為が非常に大きな役割を果たしています。浮舟の場合はそれが特に目立ちますが、玉鬘の場合もそうですし、柏木、六条御息所、明石の上の場合もそうです。書く行為それ自体は近代国家においてはいわゆる「内容」の為に抹殺されていきます、いや、抑圧されていると言っていいかもしれませんが、書くレベルを生かすといわゆる内容がディスプレイされることがあったり、内容の定義が非常に難しくなったりします。浮船の手習いの場面は特に目立ちますが、そこでは誰にともなく書くという行為を示すことによって、内容を伝えるという行為が非常に複雑に描かれています。同一線上で考えれば、「宇治十帖」もそれまでの物語をディスプレイすることになります。この場合、ディスプレイするということは前のものを否定するという意味では決してありません。書く行為がもたらしうる「意味」を違う次元にするということです。

このように『源氏物語』の不安定さとも言うべきものを読み取って行く作業は、メンタル・エコロジーと深く関係していると思います。ディスプレイメントの働きの為、安定した状態が継続することはほとんど不可能になるわけです。言い換えれば、『源氏』は、どの部分を見ても、境界線をはっきり描くことが出来なくなるようになっていて、はっきりしたボーダーがない限り、自分と他者の区別が二項対立的ではなくなるはずで、そう考えれば、『源氏物語』は反戦争の立場に存在していることにならざるをえないことになります。本居宣長が主張していた「ものの哀れを知る」はこのように解釈できるかもしれませんが。宣長が示唆的に言っていたように、『源氏物語』が近代国家のナショナル・アイデンティティーのシンボルとは程遠いところに存在していることは確かのようにです。

今日の私の話は、所詮海の向こうからやって来た外来種の戯言に聞こえることでしょう。そして、そのこと自体がこうした議論をすることの難しさを物語っているのかもしれませんが。しかし、少なくとも岡田リチャード英樹という外来種は、在来のものを絶滅させて、モノカルチャーの状態にするつもりではないのです。多くの人々がいうように「物語」という行為からすべてが始まるとしたら、我々は何かを常に物語るしかないですね。ただ、その際、『源氏物語』のように、始まりも終わりもない語りにならなければなりません。そういう語りこそエコ的な語りになり、人々のメンタル・エコロジーのためになると思います。